

# ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

|                    |                                                                                                                                                                                                                                                       |
|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 教員氏名               | 甲藤 さち                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 主な担当科目             | 合奏Ⅰ①②③④/Ⅲ①②③④/Ⅳ①②③④/合奏特別演習①②(月曜5,6限)(オーケストラ),合奏Ⅰ①②③④/Ⅲ①②③④/Ⅳ①②③④/合奏特別演習①②(木曜2限)(オーケストラ),室内楽(木管,ハープ含む),器楽,大学院オーケストラスタディ特別演習                                                                                                                            |
| 2025年の教育目標・授業に臨む姿勢 | AIやロボットには成し得ない、人間の感性に訴え得る生身の人間の表現とはどういうものか、共に研究していく。不穏な世界情勢や不安定な経済事情の中、自分の可能性を知り、今、不安を感じながらもこの恵まれた環境で音楽を学ぶことができている意味、音楽を通じて自分や周りのために活かせる事とは何かを一緒に考える。                                                                                                 |
| 2025年の教育に関する自己評価   | 演奏家コースの学生3名を含め、専任就任以来最大の14人の主科門下生を受け持つことになり、体力、気力に加え、ますますの経験値と知見が必要になったと感じる一年だった。若い世代の多様性やレベルの格差を踏まえつつ、個性に寄り添った指導を心がけ、学生が音楽やフルートに関わっていく自分の価値をそれぞれが見出す手助けはできたと思う。                                                                                      |
| 2025年のFD活動に関する自己評価 | セメスター制度の導入については、室内楽レッスンの100分のレッスン時間を有効に使いこなせば、むしろ内容が良くなる感触があった。未来に向けた芸術表現学科の教育の中でも、実技に関してはいつも最先端の音楽の需要に関心を持ち、実際にホールにも足を運ぶ必要があるが、一番長い時間関わったのはコンクールであり、教職を目指す弦管打ウィンドシンフォニーコースの学生へも指針を示すことが出来たと思う。ハラスメントについては、特に学生と話題にはしていないが、全く問題はなかったと思う。              |
| 授業改善のために取り入れた研修内容  | 本年度のAIの活用については、概ねデータ保存に留まったが、アンサンブルで、学生が移調の譜面を作成する際に共に研究ができた。実技レッスンの内容については、学生が将来においても社会に生の音楽を届けたいという意欲を培うためには、自分自身が演奏する機会を増やし研究領域を広げる必要を感じ、Duoリサイタルを開催した。Web配信、ロボット、音楽生成AIなどに対抗して、生身の人間が演奏する意味、クラシック音楽に携わる者が、作曲家、共演者、聴衆に敬意を払いながら活動続ける価値について学生と話し合った。 |

## 2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1906 教員名:甲藤 さち

### 1)アンケート結果に対する所見

管弦楽の授業におけるシーティング(座席配置)については、各楽器の担当教員がそれぞれの実技試験の成績を参考にしつつ、取り上げる曲目の難易度やスケジュールを勘案のうえ、公平性に最大の配慮をもって決定している。特に定期演奏会やサマーミュージア、音大フェスティバルといった学外での公演に出演する学生については、その主旨や意図を深く理解して授業に臨んでいると認識している。

また、通常の授業においても、合奏の中で作曲家や指揮者の意図を具現化するためには参加者全員の協力が不可欠であるという意識が浸透しており、質の高い演奏やレベルの向上を目指して各自が予習・復習に時間を割いている様子が窺えるのは大変心強い。

### 2)要望への対応・改善方策

「学外での演奏会に向けた集中練習が 20:50 まで行われたことについて負担を感じる」という意見が見受けられた。通常の授業を終えた後に連日リハーサルが続くスケジュールは、学生にとって肉体的・精神的な負担が大きいことは十分に察せられる。

プロフェッショナルなオーケストラの現場においては、指揮者のスケジュールやホールの空き状況によって夜間リハーサルが行われることは少なくなく、またソワレ(夜公演)やオペラの本番では 21:00 を過ぎることも多々ある。こうした将来の現場の実情を早い段階から視野に入れさせるとともに、今後は練習日程の事前周知と本学としての取り組み方の説明をより丁寧に行う。そのうえで、学生自身が主体的にスケジュール管理や体調管理を行えるよう指導を徹底する。

なお、今回の当該項目における回答数が少なかったため、今後はより多くの学生が忌憚のない意見を寄せられるよう、アンケート実施時のアナウンスやインフォメーションの徹底を図る必要性を認識している。

### 3)今後の課題

プロのオーケストラ現場で長年経験を積んだ指導教員が、レッスンや室内楽授業の合間を縫って、週 3 コマ・2 つのオーケストラ授業にそれぞれ通常 6、7 名体制で張り付き、その場で直接指導するという本学特有の授業形態の希少性と教育的価値について、今後もオリエンテーション等を通じて丁寧に説明していく。

近年、本学学生の演奏に対する学外からの評判や指揮者からの評価はますます高まっており、都内プロオーケストラへの入団を果たす卒業生が続出していることから、当授業のシステムが着実に演奏力の向上に寄与していることは明白である。この成果をさらに確実なものにするため、授業ごとに担当教員間で学生の様子や情報を緊密に共有し連携を図るとともに、教員同士が互いの指導法に触れて切磋琢磨できるこのメリットを最大限に活かし、一層充実した授業を展開していく。

以 上